

## 感謝をこめて



横山 ひろみ

まず最初に、このように長きにわたって神戸親和女子大学に勤務させて頂きましたことを、心より深く感謝申し上げます。何の取り柄もない私が勤めさせて頂けましたのも、すべて大学の皆様が導き、支えて下さいましたお蔭でございます。

さて、来年で大学は創立50周年を迎えますが、私が初めて非常勤講師としてこの大学に勤務させて頂きましたのは、大学が出来てまだ8年目のことでした。当時は1号館、2号館と体育館だけが、ポツン、ポツンと建っているだけでした。大阪方面から山を越えてやって来たこと、大学としての施設がまだ整っていないことなど、少し戸惑いはしましたが、温かみのある学風が感じられ、好感が持てました。

当時2階にあった非常勤講師控室で、他大学の先生方とよくお話をしましたが、ある時、一人の先生が、「やれやれ、この大学は田舎大学だ。」と言われました。私が非常勤講師として他に行っていた大規模な大学に比べると、この大学は地理的にも、またハード面、ソフト面でもまだ発展途上に見えましたので、私も心の中で何となく「ああ、そうかも。」と思いました。

しかし、その2年後に、私は専任講師にして頂くことができました。そして、その時に私の気持ちは大きく変化しました。フランス語で言うと、*apprivoiser* [アプリヴォワゼ] が起こったのです。それは、サン・テグジュペリの『星の王子様』の中で語られる重要な言葉で、私は「責任を持って、絆をつくる」といった意味に理解しています。

王子様は、自分の小さな星で、1本のバラの花を大切に世話をしていました。しかし地球に来てみると、同じ色と形のバラの花が何百と咲いていたのです。それらと王子様のバラの花との決定的な違いは何かというと、それは王子様のバラの花は、王子様が*apprivoiser*したものである、ということなのです。王子様が愛情を注いで世話をし、責任を持って絆を作ったバラの花なのです。他のバラは無関係に咲いているだけです。

それまで、私にとって親和女子大学は、他にたくさんある大学の中の一つの大学に過ぎませんでした。ところが、専任教員となった途端に、それは王子様のバラの花と同じ存在になったのです。私は親和女子大学を*apprivoiser*したのです。私が責任を持って愛情を注ぐ対象になったのです。もはや他の大学とは比べものにならない、私にとって親和女子大学は、「かけがえのない、唯一の大学」になったのです！ それは私の大学、そこで働く教職員の皆さんは私の家族、学生の皆さんは私の子ども達になったのです。その大切な大学が、田舎大学であっていいはずがありません。

そこで私は、「どうしたらもっと良い大学になるだろうか？」と考える考えました。そして、「こうした

らもっと良くなる」と思うことを提案することにして、勇気を持って「親和女子大学を魅力的にするための提案書」を大学に提出しました。今から25年前のことです。そこでは、次のようなことを提案しています。

大学名に「神戸」をつけて、「神戸親和女子大学」にする。神戸方面からスクールバスを運行する。大学前のバス停の名前を、「霞ヶ丘」から「親和女子大学前」に変更させる。正門前に緑の植え込みを作って、大学名を書いた大きな看板を立てる。

また、学内美化としては、学生会館から1号館の間など、キャンパス内に花をたくさん植える。(当時は花がほとんど植えられていませんでした。)各階の廊下に明るい色調のカーペットを敷く。階段の踊り場付近にソファを置く。おしゃれなシャンデリアをつける。以上のことも提案いたしました。大学名を神戸親和女子大学にした方が、全国的に広く認知されますし、キャンパスに花があふれ、校舎内も女子大らしく美しく、おしゃれになると、きっと学生さん達が喜ばれると考えたからです。そしていま、これらの提案はすべて実現されています！本当に嬉しいことです。

さらに、当時体育館で行われていた入学式や卒業式を、もっと潤いのあるものにしたいと思い、小さい音でBGMを流すことを提案しました。現在もポートピアホールで流されている音楽は、私が自宅から持って来ましたCDです。(曲などを変更してくださって結構です。)また、大学は国際的な交流が盛んですので、特に入学式で保護者の方々に知って頂けるようにと、海外の提携大学の先生方からのビデオメッセージをスクリーンに映すことも提案しました。オックスフォード大学の先生や、トロント大学のミラー教授、ベック教授、モーレイ附属小学校長などが、笑顔でお祝いのメッセージをくださり、国際色が高まりました。

このように、何の権限もない若手教員が提案したことを取り上げて下さいましたことで、大学の度量に感謝するとともに、一年中季節の花が咲き乱れ、どんどん良くなっていく大学を見て、私は本当に幸せな気持ちになりました。

また、研究面についても、私は大学での仕事に合わせて変化していったと思います。最初、私はフランスの思想家、ジャン＝ジャック・ルソーについて研究していましたが、児童教育学科に所属するようになってからは、教育分野に比重を移して、ルソーの教育論について『エミール』を中心に研究するようになりました。その後、近年では、日本の教育について、実験学校の試み、「生活単元学習」等の研究もしました。また、女性学を担当するようになって、女子教育論についても研究しました。こうした各々の分野についての研究論文は、『教育学論説資料集』への収録論文に選んで頂くことができました。このように、ルソーから日本の教育、女子教育まで研究の幅が広がるとは、私自身、夢にも思いませんでした。これも、神戸親和女子大学とともに歩むことによって成長させて頂けたことと、大変感謝をしています。

役職についても、学生担当部長を皮切りに、いろいろなお仕事をさせて頂きましたが、すべて有能な課長さん達がサポートして下さいましたことで、何とか形だけでも務めることができました。今も、大変有難く感謝しています。また、事務室の中に身を置くことによって、職員さん達の仕事、大学の仕事がよく分かりました。そして私達教員が、職員さん達によっていかに支えて頂いているか理解でき、襟を正さなければ、と銘じました。

いま、私が一番嬉しく思うことは、神戸親和女子大学が素晴らしい発展を遂げて、社会から高い評価を受ける大学になったことです。大学認証評価でも高評価を頂き、大学ランキングでも、いつも名前が挙がっています。今は大学の施設や規模を競う時代ではなくなり、教育の中身が評価されるようになったからでしょう。

「学生一人ひとりの成長のために」、教職員の皆さんがひとつになって教育に当たっておられる、「親和の教育」の時代がやって来た、と私は思っています。また、親和の学生さん達は、素晴らしいです。誠実

で素直で、私の言うことを一生懸命に聞いて下さる。そしてそれを受け入れ、実行され、どんどん成長して行かれる。それが何よりも素晴らしいです。私などは拙いことしかお話できないのですが、彼女達がそれ以上のことを実行して行かれるのは、本当に幸せなことでした。

「心をこめて」お世話をすれば、そうしてもらった人は、他の人にもそうしてあげられる人になる、と私は思っています。そして、学生の皆さんは、そうした人になって下さっています。教職員と学生の「心が通い合う大学」、それが親和の伝統となって、脈々と続いています。それは他では真似のできない、親和の宝物です。これからも、どんな時代になっても「親和の教育」は継承され、発展し続けていくことでしょう。私はこれからも地元神戸から、神戸親和女子大学をずっと応援し続けていきたいと思っています。

力足らずな私ゆえ、いろいろとご迷惑をおかけいたしましたことと存じますが、皆様にご親切にお助け頂きまして、今日まで勤めさせて頂くことができました。心から、厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。